

子育て支援講座における造形活動の取り組みについて

——表現する喜びを考える——

田 端 智 美

The Approach of Art Activity in a Childcare and Family Support Course

—Consider Joyfulness Expressing—

Tomomi TABATA

はじめに

桜花学園大学では2003年より保育子育て研究所（現：教育保育研究所）において、地域の子育て交流の拠点として交流会を開催してきた。その中で2015年より「はじめてのおえかき講座」「はじめてのえのぐあそび講座」「はじめてのはさみ講座」を行い、子ども・保護者に対して乳幼児時期における造形活動の奨励をしてきた。この講座に対する分析を行い、意義をまとめる。また、地域の子育て力を高めるためにボランティアで参加した桜花学園大学保育学部学生が、講座に参加して学んだ内容についてアンケートを通して分析し、今後の展望を考察する。

1. 子ども・子育てにおける背景

2012年、子ども・子育て関連3法が成立した。これに伴い2013–2014年には「子ども・子育て支援事業計画」が策定され、円滑な施行への準備のために例規制定がなされた。そして、2015年には「子ども・子育て新支援制度」が始まった。この一連の背景には、核家族化が進み、地域のつながりが希薄化していることがある。家庭や地域の子育て力が低下している中、保護者は子育てに不安や負担感をもっている。この解消のために「子ども・子育て新支援制度」が導入され、地域子ども・子育て支援の一層の充実した取り組みを目標の一つとして挙げられている⁽¹⁾。この「子ども・子育て新支援制度」の中に、地域子育て支援拠点事業についての充実が挙げられている。厚生労働省は、地域子育て支援拠点の設置に力を入れ、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供している。2013年には、従来のひろば型・センター型・児童館型から、一般型・連携型に再編した。ひろば型・センター型においては一般型に再編し、地域機能強化型とした。また児童館型においては連携型とし、実施施設や日数、スタッフ（有資格者等）等の機能強化を挙げている。2015年においては一

般型と連携型が、全国7063ヶ所で実施されている⁽²⁾。本校での取り組みは、後者の連携型であり、大学生のボランティアを日常的に受け入れ、おおよそ週4日3時間程度開設し、保育士資格を持つスタッフを配置している。子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進だけでなく、子育て等に関する相談・援助の実施、地域の子育ての関連情報の提供、子育て及び子育て支援の講習等の実施も行っている。

本講座は、その子育ての講習の一環として行ったものである。子育て中の保護者が、子どもと一緒に参加し、その中で子どもの発達について学ぶという内容である。また地域子育て支援拠点として、学生ボランティアを配置し、地域の子育て力を高めるという目的で行った。

2. 研究方法

(1) 先行研究について

川瀬(2013)は、大学で実施している地域子育て支援の現状について、子ども・保護者を対象に支援と活動についてまとめている。その中で「生きる力」の育成について、素地は乳幼児期の家庭教育においてすでに始まっているとし、それを補うために、地域社会での子育て参画の必要性を説いている。その中で、子どもの発達に合った遊びが重要であるとし、地域社会でその遊びが行われる場が必要であると述べている⁽³⁾。

本学で実施した講座は、その遊びを地域で行ったものであると同時に、保護者が子どもの発達に合った造形における遊びについて学ぶものである。遊びの場の提供という点において、目標は同じであると考え、その場の重要性について再確認した。

矢野他(2007)は、大学で実施しているのではないが、行政と連携して公共施設で子育て支援の一環として造形活動を行っている。大学の知的財産と学生のマンパワーを、造形活動を通して子育て支援に貢献するという目標は、本学の講座の目標と同じであると考え。また造形活動における保護者のアンケートについてまとめているが、尺度評定法を用いた分析は割愛されており、自由記述のみの分析となっている⁽⁴⁾。筆者はアンケートの分析法を参考とすると同時に尺度評定について一考察を試みる。

小笠原(2013)は、大学の子ども・子育て支援センターで実施している造形活動について、活動内容とともに、特に学生の学びについて分析している。小笠原は造形活動のプログラムづくりを課題にしつつ、学生の学びの充実について述べている⁽⁵⁾。筆者もプログラムづくりについて充実を課題にしつつ、学生のよりよい学びにつなげる考察を行う。

(2) 講座内容と研究方法について

実践について、2014-2016年に以下の3つの講座を行った。「はじめてのえのぐあそび」講座については2回(2014, 2015)実施、「はじめてのおえかき」講座については2回(2015, 2016)実施、「はじめてのはさみ」講座については2回(2015, 2016)実施の計6回を行った。

講座については、筆者がプログラムを企画した。企画した講座について、教育保育研究所の

子育て支援年齢別交流会の中で参加を募った。その際、発達を考慮し、「はじめてのおえかき」講座については1歳以上とし、その他の講座については2歳以上として募集を行った。結果、3年間で119名の保護者、133名の子どもの参加があった。

また講座には地域の子育て支援力を養うという目的で、本学保育学部学生のボランティアを募った。3年間で114名の参加があった。

講座のねらいとしては、表現を楽しむこととした。保護者・子ども及び学生ボランティアが表現することを楽しむと同時にその気持ちを共有する。そうする事により各々のより楽しいという気持ちを引き出し、表現の喜びを知る。また講座の時間内に、子どもの表現における発達を保護者向けに話をした。保護者が、子どもの発達に合った遊びを家庭でもできるように、画材・用具の使い方、場の作り方等説明した。そして講座のまとめとしての保護者向けのプリントを、4コマ漫画を交えて作成し、親しみやすいものとした（写真1）。



写真1：保護者向けプリント一部

また、講座の時間内後半に、語らいの時間をもうけ、保護者同士をつないだり、相談に乗ったりした。語らいの時間には、学生も参加し、子育てについての悩みを共有した。学生は保護者対応の基本を身につけることができるよう、異なる学年でペアを組み、相互間で対話をした。

今回の研究方法としてこの一連の講座において行った保護者アンケート・学生アンケートの分析を行う。最初に保護者の子育てにおける造形への考え方を分析する。そして今後の子育て支援の課題や展望を考察する。また学生アンケートの分析として、このボランティアの経験についてどのように学生の学びにつながっているのかを明らかにし、保護者・子どもとの直接にかかわる経験の重要性について明確にすることとする。

以下に実践内容の一例を記す。

①実践「はじめてのえのぐあそび」

日時 : 2014年2月16日

場所 : 本学リズム室

受講者: 保護者18名・子ども21名

実践者: 筆者・学生ボランティア16名

概要

10:30 はじまりの手遊び

10:40 子どもの絵の発達について説明

(スクリブルの変化・頭足人について)

10:50 発達にあった画材の説明、感触遊びの説明

10:55 綿棒を用いて、紙皿の上に絵の具で自由に描く

その後、手や指を使って自由に描く

11:20 保護者との語らい

11:35 終わりの手遊び

11:45 終了



写真2: 活動の様子1

②実践「はじめてのはさみ講座」

日時 : 2016年2月26日

場所 : 本学リズム室

受講者: 保護者20名・子ども23名

実践者: 筆者・学生ボランティア28名

概要

10:30 はじまりの手遊び

10:40 はさみの年齢別発達について説明

(1回切り、直線切、円の切り方など)

10:50 発達にあったはさみの説明

10:55 棒状の紙をはさみで切る

11:05 はさみで切ったものを野菜に見立て、でんぷんのりを用いて紙皿に貼る。

11:20 保護者との語らい

11:35 終わりの手遊び

11:45 終了



写真3: 活動の様子2

③実践「はじめてのおえかきあそび」

日時：2015年2月12日

場所：本学リズム室

受講者：保護者20名・子ども22名

実践者：筆者・学生ボランティア17名

概要

10：30 はじまりの手遊び

10：40 子どもの絵の発達について説明
(スクリブルの変化・頭足人について)

10：50 発達にあった画材の説明、クレパス・ペンの説明

10：55 90cm×5mの紙に自由に絵を描く

11：20 保護者との語らい

11：35 終わりの手遊び

11：45 終了



写真4：活動の様子3

3. 結果と考察

(1) 保護者向けアンケート調査結果について

- ・調査期間 2014年～2016年
- ・回収率92%（保護者参加者119名 保護者アンケート回答数110）
- ・調査方法 アンケートについては、8項目とした。講座の事後、保護者は子どもを抱いていることが多く、筆記具を持ちにくいことを考慮し、学生により聞き取りで実施した。

表1. アンケート項目

	はい	いいえ	なんとなく
子どもの年齢			
子どもの性別			
保護者は楽しむことができた			
子どもは楽しむことができた			
家でおえかきをしたことはある			
子どもがスクリブル（なぐりがき）をするのを知っている			
子どもがスクリブル（なぐりがき）をするのを楽しんでいた			
子どもが2-3歳頃、頭足人を描くのを知っている			
本日の作品を家に飾る			
自由記述・ボランティアに参加した学生に一言			

表2. 子どもの年齢

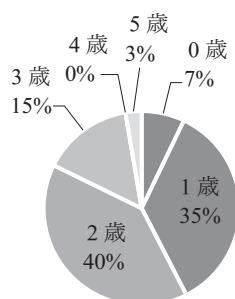


表3. 子どもの性別

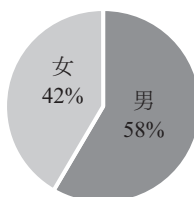


表4. 保護者は楽しむことができた

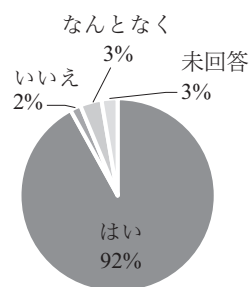


表5. 子どもは楽しむことができた

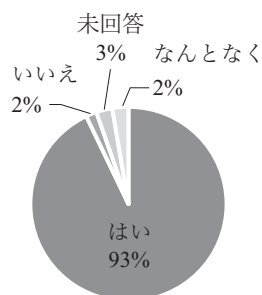


表6. 家でおえかきしたことがある

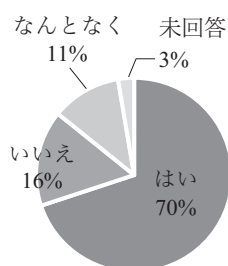


表7. 子どもがスクリブル(なぐりがき)をするのを知っている

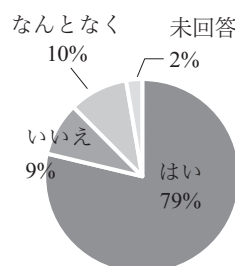


表8. 子どもがスクリブルをするを楽しんでいた

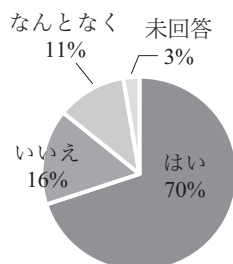


表9. 子どもが2-3歳頃、頭足人を描くのを知っている

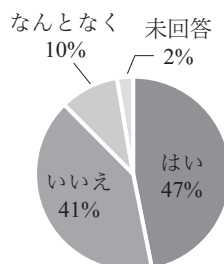
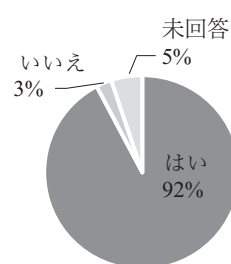


表10. 本日の作品を家に飾る



〈自由記述について：一部抜粋〉

- ・家ではなかなか絵の具を使うことは難しいので、良い経験になりました。
- ・家では汚れるのを気にしてのびのびさせられないので、私も子も楽しかったです。息子を抱っこしてくれてありがとう。なかなか他人にはなつかないの。
- ・やさしく声を掛けてくれ、安心して遊ばせることができました。手遊びも喜んでいました。
- ・学生さんがいてくれて良かったです。粘り強くかかわってくれてありがとう。
- ・学生Sさんに教えてもらってペンのふたの開閉ができるようになりました。ありがとうございました。
- ・子どものテンションもすごくあがっていました。笑顔で遊んでくれてありがとう。
- ・泣いていてすみません。ありがとうございました。
- ・子どもとコミュニケーションをとることが難しいです。話しかけることが大切ですね。
- ・ずっと遊びまわっていた子どもに、学生Mさんがずっと付き合ってくれました。助かりました。子どももとても楽しそうでした。
- ・講座の回数を増やしてほしい。
- ・自由に遊ばせてくれて嬉しかった。
- ・楽しく遊べて親子でよい時間を過ごせました。
- ・テーブルの上で描くというイメージだったので、今回のようなレイアウトになることを予め教えて頂けたらよかったです
- ・いろいろな画材を体験できてよかったです。ありがとう。

(2) 学生アンケートの調査結果について

- ・調査期間 2014年～2016年
- ・回収率82%（学生ボランティア参加者114名 アンケート回答数93）
- ・調査方法 アンケートについては、講座の事後、筆記様式で学生に実施した。

表11. アンケート項目（学生）

	思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
活動内容					
自由記述：感想					
経験：子どもと遊ぶ機会をもてた					
経験：親子のかかわりを見ることができた					

経験：親子の前で出し物をやる機会をもてた					
学び：子育て支援の様子が分かった					
学び：自分が将来保育者になるために役立った					
学び：小さな子どもへの関わり方について学ぶことができた					
学び：保護者への対応や関わり方について学ぶことができた					

表12. ボランティア参加学生

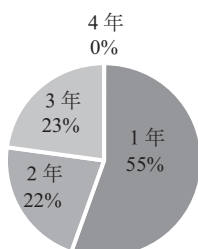


表13. 経験：子どもと遊ぶ機会をもてた

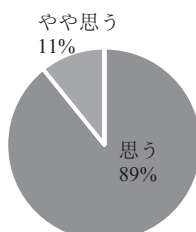


表14. 経験：親子のかかわりを見ることができた

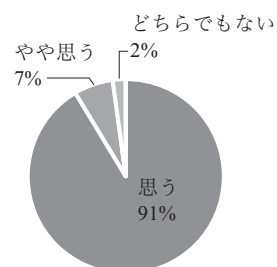


表15. 経験：親子の前で出し物をやる機会をもてた

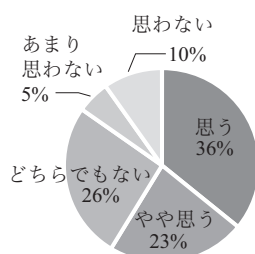


表16. 学び：子育て支援の様子が分かった

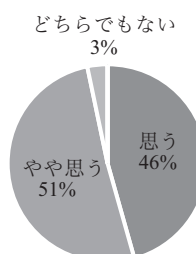


表17. 学び：自分が将来保育者になるために役立った

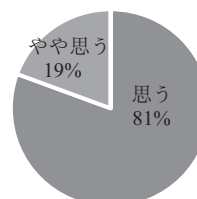


表18. 学び：小さな子どもへのかかわり方について学ぶことができた

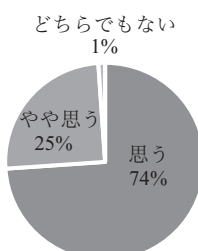
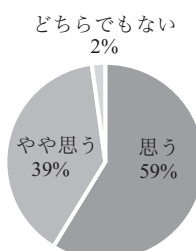


表19. 学び：保護者への対応やかかわり方について学ぶことができた



〈自由記述：感想について：一部抜粋〉

- ・子どもの発達がわかった。
- ・6ヶ月の子どもの抱っこさせてもらった。とてもかわいかった。母親が抱っこすると泣き止んだ。授業で習ったことが目の前で起こって嬉しかった。
- ・親子のかかわりを見ることができた。
- ・母親と一緒に交流できたことが嬉しかったです。
- ・最初は恥ずかしがって描いてくれなかった子どもも、沢山描いてくれるようになって嬉しかった。
- ・子どもの発達にあった絵と一緒に描くことができてよかった。
- ・年齢別の発達の違いを見ることができてよかった。
- ・先輩の子どもとのかかわり方を見て、どのようにかかわればいいのか学べた。
- ・最初は自分の近くでしか描いていなかったけど、慣れてくると大きく描いたり、他の子どもと一緒に描いたり、真似したりと、様々な子どもの姿を見ることができてよかった。
- ・年齢によって点を描いたり、線を描いたりできることが違うことがわかりました。実際に見ることができて良かったです。
- ・人見知りの子どもが多く、かかわるのが難しかったが、とても勉強になりました。
- ・1・2歳の子どもの行動が読めず、ずっとあたふたしていました。
- ・3歳以下の子どものはじめてかかわったが、かわいかった。
- ・まさにはじめてはさみを使う瞬間に立ち会えてよかった。徐々にはさみを使えるようになっていく様子が見ることができてよかった。
- ・短時間で成長が見ることができて良かったです。
- ・2歳児の子どもがあそこまではさみを使えると知って驚きました。
- ・画用紙の色で、見立て遊びができて楽しかったです。子どもの創造力の豊かさに驚きました。
- ・実習以外で子どもと触れ合える良い機会だった。
- ・子どもの興味をひく声かけが難しいと感じた。

(3) 考察について

〈保護者アンケートについて〉

子どもの参加年齢については、2歳が最も多く40%であった。次いで、1歳児（35%）3歳児（15%）0歳児（7%）であった。0歳児については、見学だけしたいと申し出る保護者もいた。保護者の子育てについての積極性を感じることができた（表2より）。

今回の講座では、子ども・保護者・ボランティア学生がともに表現を楽しむことをねらいとした。おおよそ子ども・保護者が楽しむことができたと回答しているが、広い教室・学生の多さ等に戸惑う子ども・保護者もいた。また、事前に「汚れても良い格好で参加してください」

と案内をしたが、服の汚れや手足の汚れを気にして参加を戸惑う親子もいて、楽しむことを半減させたようであった（表3，表4より）。

造形活動における家庭での経験値を問うことについては、「家でおえかきしたことがある」と回答した保護者は70%と多く、比較的意欲的に取り組んでいることが分かった（表6より）。

造形に関する発達についても、知識を持ち合わせている保護者が多い。しかし活動の中で、スクリブルをする年齢であるのにもかかわらず、保護者は子どもに、顔や図式化された絵を描くことを求める場面があった。このことから年齢にあった活動を行っているとは言い難い状況であると察する。また「子どもがスクリブルをするを楽しんでいた」事に対し「いいえ」と答えた保護者は16%あり、発達過程において必要な事柄であることを理解しているとは、言い難い状況であると察する（表7，表8，表9より）。

「本日の作品を家に飾る」と回答した保護者は92%と多い。家庭で子どもの作品を飾ることにより、子どもとの会話が増え気持ちを共有する機会を増やすことに繋がってほしいと考える（表10より）。

自由記述から、「家ではなかなか絵の具を使うことは難しい」「家では汚れるのを気にして」とあるように、造形について家でできない活動としてとらえているということが分かった。また「安心して遊ばせることができました」「学生がいてくれてよかった」とあるように、保護者は日頃の子育てから少し解放された時間を過ごすことができたと察する。そういった時間の中の余裕からか「ペンのふたの開閉ができるようになった」「テンションがすごくあがっていました」とあるように、保護者は子どもの新たな一面が発見でき成長を感じることができたと考える。

〈学生アンケートについて〉

参加学生については1年生が多い。低学年より子育て支援に、またボランティアに興味を持っていることが窺える（表12より）。

子育て支援についての経験を問うアンケートについても、「子どもと遊ぶ機会をもてた」「親子のかかわりを見ることができた」の問いに対して「思う」と答えた学生は多い。しかし「親子の前で出し物をする機会をもてた」の問いに対して「思う」「やや思う」と答えた学生は合計して59%とやや少なかった。始まりと終わりの際は、手遊びをすることとなっているが、保護者・子どもに対し、自信を持ってできたとは言い難いと察する（表13，表14，表15より）。

子育て支援についての学びを問うアンケートについても「子育て支援」「保育者」「小さな子どもへのかかわり」「保護者への対応」についての学びについて良い回答が得られた。その中で「子育て支援」「保護者への対応」については「やや思う」の回答が比較的多いところから、子どもへは難なく対応しているが、保護者については苦手としていることが窺える（表16，表17，表18より）。

自由記述で学生は「子どもの発達について分かった」「授業で習ったことが目の前で起こって」と回答しており、0-3歳の発達について実践的に理解を深めたことが窺える。しかし「親子のかかわりを見ることができた」「母親と一緒に交流できた」とあるものの、保護者とのかかわ

りという点での記述が少なかった。学生が保育現場に出れば保護者への子育て支援が求められるため、保護者とのコミュニケーションスキルを身につけることは必要不可欠であることを今後の学びの課題とする。

(4) 今後に向けて

今回の考察で明らかになった事柄に対し、今後の検討策を考える。

保護者に対しては、より参加しやすい講座を提供したいと考える。今回の講座は対象年齢で参加を区切ったが、発達を継続的に考えるという点から、年齢別でコーナーをつくり活動を行うことを検討したい。また、事前案内の不足で楽しむことを半減した親子がいたため、講座のねらいを事前に伝えたり、昨年度の講座の様子を紹介したりと、心と体の準備を行った上で活動に臨むようにしたいと考える。

保護者は、造形活動を通しての子育てについて戸惑いを感じながらも、意欲的に取り組みたいと考え、期待していることが分かった。今後も奨励していくことが必要である。また、造形活動は家庭ではできない活動としてとらえている保護者もいることが分かったため、家庭でもできる活動を紹介していきたい。家庭で行うことで親子の会話が増えることを期待し、また作品を飾って気持ちを共有してほしいと考える。保護者が発達を理解した上で、造形を通した子育てに意欲的になり、また子どもが造形を通して感受性や想像力を養ってほしいと考える。

学生については、このような場をより多く提供していくことを検討策とする。今回の参加者は1年生が多かった。1年生は子育て支援の学びについて初心者である。子どもと保護者両方が楽しむための、手遊び・表現の技術・会話等の保育実践の学びが必要である。このような活動に参加する事で場数を踏み、机上で学んだことと結びつけ、学修の充実に繋がってほしいと考える。

4. まとめ

この造形活動の意義を図1にまとめる。今回は造形活動についての講座を行い、保護者・子ども・学生を含めた交流を行ってきた。造形を介した講座を設けることで地域の0-3歳の子どもの遊びの場の提供を行った。講座の中で、保護者は家の中とは異なる子どもの姿に気づく。これは新しい遊びの中での発見でもあり、また年齢に応じた発達を知るという講座の中での発見である。今回の講座で保護者は、子どもがスクリブルをすることや、頭足人を描くことを知った。また発達に応じたはさみやのりの使い方を知った。そのような子どもの様子を確認し、発達段階を知り、子どもとともに「できた」という気持ちを共有することができた。この「できた」という気持ちこそが表現の喜びである。そしてこの喜びが感受性や想像力を養う。子どもの感受性や想像力を保護者が知り、互いが表現することの楽しさ・喜びを感じるからこそが本活動の意義である。保護者は、造形を遊びのひとつだと考え、子育てにおける重要な活動のひとつであると考え方を改めたといつてよいであろう。

保護者はこの講座の中で子どもの新しい姿に気づいたわけであるが、ここには学生ボランティアが子どもと接しているということも一役を担っているであろう。子どもと保護者と学生がかかわることによって相乗効果となっていると考える。学生も子どもの感受性や想像力を生で感じ、表現の喜びについて考えることができたであろう。地域における学生のマンパワーを今後も活用する必要性を再確認した。

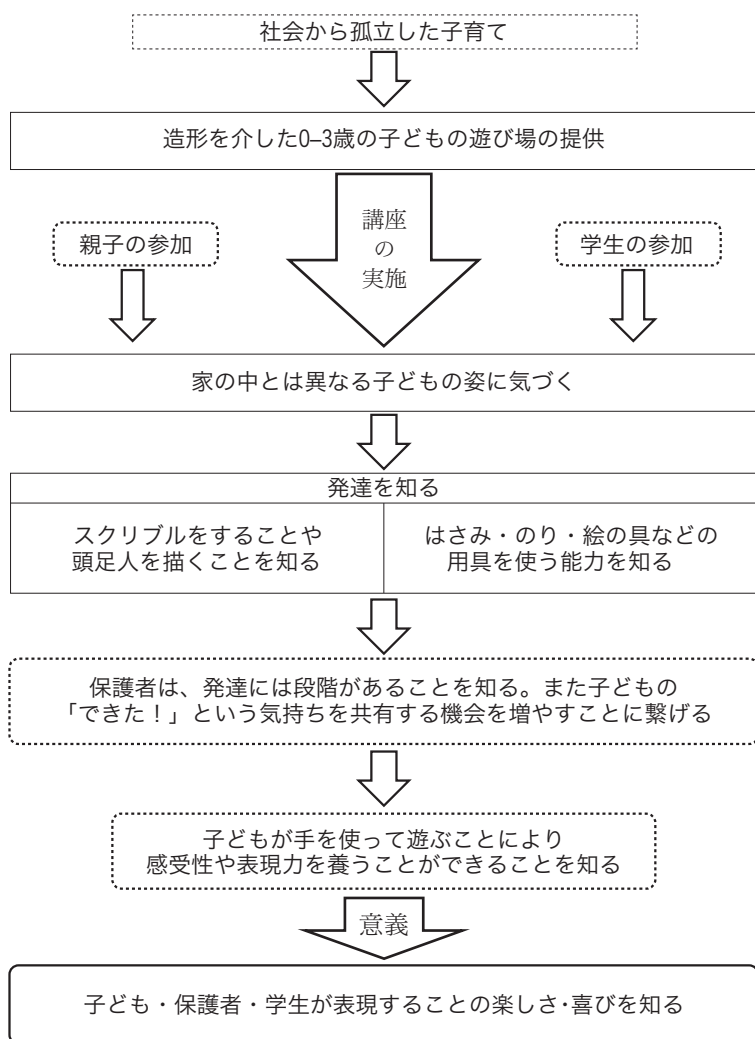


図1. 本活動の意義

おわりに

今後の課題として、造形活動について、みんなで行うことの楽しさ、家庭で行うことの楽しさの2つを差別化しつつも、共に意義があることを伝える、子ども・保護者がより充

実した親子関係を築くことができる講座を考えて行きたいと考える。そのために講座のみならず、チラシなどを使って造形に関する分かりやすい発達の説明や、遊びの提案を行っていきたいと考える。

最後に、この講座の開催において、素晴らしい研究環境と多大なるご協力を頂いた本学教育保育研究所のスタッフの方々に誠意を表すとともに感謝いたします。

註

- (1) 子ども・子育て新支援制度 内閣府
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html> (2017年11月1日取得)
- (2) 地域子育て支援支援拠点授業 厚生労働省
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html (2017年11月1日取得)
- (3) 川瀬綾子「大学における地域子育て支援の現状と課題：京都造形芸術大学芸術文化情報センターピッコリー（こども図書館）の取り組みを中心に」、京都精華大学紀要北克一教授退官記念特集号、2013年、2-7頁
- (4) 矢野 真 他「造形ワークショップを通した大学と行政、地域の連携による子育て支援」、鎌倉女子大学紀要第14号、2007年、52-54頁
- (5) 小笠原文「「ぶんぶんひろば」における授業の実践」、広島文化学園大学子ども・子育て支援研究センター年報、2013年、58頁

(受理日 2017年12月21日)